

「初等音楽科教育法」における学習指導案作成に関する研究

森 保 尚 美*

(2015年2月6日 受理)

How to Make a Teaching Plan for Students of Elementary Music Class

Naomi MORIYASU*

“Teaching plan” is utilized widely as a sharing tool to understand student's aim and ideas in Japan. Teaching plans not only various formats, but also differ according to each subject and each teacher's viewpoint and experience.

The aim of this study is to identify the point to support of “how to make the teaching plan” targeted for the music teaching methodology class.

I divided the teaching plans based on students' feedback, and divided them into several categories depending on the relationship between a target and the student's description. Based on the results, I observed some points for improvement in teaching plan to enhance students' learning.

Keywords: the teaching plan 指導案, elementary music class 初等音楽科教育法

はじめに

小学校の組織的な授業研究の方法は、授業の参観や協議によるもの、模擬授業を実施するもの、校内研究として成果をまとめるものなど多様な方法があるが、授業計画を共有するツールとして学習指導案の存在は一般的である。また、時代により教案、支援案等と呼称が異なっているものの、立案者と他者が授業計画を共有して理解する際にも学習指導案は広く活用されている。

教員養成大学においては、一般的に教育実習や就職に備えて学習指導案の立案をさせているが、授業経験の浅い学生に、児童の発達に応じた目標の設定や児童の実態に則した学習活動の構成を想定させるのは難しい。さらに、学習指導案の形式は地域や学校により様々であり、教科による記述内容にも特色があり、指導者によっても着眼点が異なっているため、有意義な指導の実現に至らないことも多い。

しかし、教科内容の知識・理解、実技練習に加えて、大学生に対する小学校音楽科指導案作成の支援は必然である。そこで、本研究では、広島女学院大学のカリキュラムに位置づけられている「初等音楽科教育法」を受講する学生を対象に、あらかじめ題材目標を設定し、指導案を作成させた後、教科目標との関わりに着目し、課題と考えられる4つの類型から考察することで、大学生にとって可能な小学校音楽科指導案作成の要点を見出し、今後の初等音楽科教育法の進め方の指針を得ることとした。

* 広島女学院大学人間生活学部幼児教育心理学科准教授

1. 問題の所在

国立教育政策研究所が国内の小中高等学校を対象に、授業研究に関する調査を実施し、まとめた『教員の質の向上に関する調査研究報告書』（2011）によると、授業研究を年1回以上実施している小学校は98.7%であり、小学校から高等学校までの校種では、小学校の授業研究の頻度が最も高いことが記載されている。同報告書においては、学校の状況に関する11設問のなかで、①教員間のコミュニケーション②授業の水準③地域平均に比較した児童生徒の学力④全国平均に比較した児童生徒の学力、の4設問を、学校の質の高さを示す指標として取り上げ、それぞれと有意に関連する校内研究の取り組みを分析した。報告書によると、小学校において、学校の質の高さを示す指標と統計的に優位な関連が見られる活動は、指導案の検討過程で校長や指導主事の指導を受けることや研究紀要を刊行することなど、内容面を高めるための活動であった。また、この調査結果を追加分析した千々布の著書によると、学校の授業水準を高めるために有効な取り組みとして、大学研究者や他校の校長等を講師として招聘すること、指導案の検討段階では指導主事や校長に相談すること、事後協議会では授業記録を使用すること等が記されている（千々布, 2014）。これらの報告からは、学習指導案を媒介にして、知識や経験のある他者と検討する活動が、個人の授業水準を高め、学校の質を高める要因の1つになっていることがわかる。

しかし、学習指導案の形式は地域や学校により様々であるだけでなく、教科による記述内容にも特色があり、指導者によっても着眼点が異なっていることから、学生への支援が漠然としたものになりやすい。

前述したように、学習指導案は、児童に学習内容を理解・体得させたり、授業研究や授業研究に用いて指導者の力量を高めたりする機能の他にも、教育実習の指導担当教諭と授業構想を検討したり、授業研究で授業構想を検討したりする機能をもつことから、作成者以外の他者からみて、授業の内容やねらい、方法がわかることが肝要である。つまり、指導案とは、1つの授業の意図を項目ごとに多面的に捉えたものであり、他者から見て指導者の意図や文脈が想定できることが大切であると考えられる。従って、児童の実態や指導案の形式が異なってもとりわけ重要なのは、指導構想の一貫性をもたせる力を身に付けさせる支援である。

また、児童の実態に照らした計画内容の適切性や、準備を含むきめ細やかな手だてに関しては、実習先での追究がより有意義であるという予測からは、大学における指導で、学生が設定した目標と題材の目標や学習活動の整合性、学習活動と指導者の働きかけの対応性が構築できるようにすることが、より効率的であるとも言えることができるであろう。

2. 研究の目的

本研究は、大学における小学校音楽科学習指導案作成の要点を見出し、今後の初等音楽科教育法の進め方の指針を得ることを目的としている。

3. 研究の方法

まず、音楽科学習指導案の歴史をふまえ、今日記述すべき内容及び表現技術について考察する。また、2014年度の「初等音楽科教育法」を受講した3年生51名が作成した指導案を、題材目標との整合性からみて、4段階のルーブリック評価で評価する。また、学習活動欄の記述について、共通事

表1 題材目標との整合性（ルーブリック1）

基準	題材計画欄	本時の目標欄	学習活動欄
4	第1時から第3時までのステップに音楽の要素を軸としたつながりがある。 例) ・リズム遊び→情景にあう楽器選び→リズムを意識した歌と楽器のアンサンブル	題材目標の言葉を使うなどして、本時の目標が題材目標の一部となっていることがわかり、身に着けさせたい力が明確である。 例) 茶摘みの特徴を感じ取り、合の手リズムを工夫して表現しよう	題材目標と本時の目標を受けた活動内容が記載されている。 例) 範唱 CD の合の手にあわせて手拍子をうつ
3	活動としてのつながりは意識しているが、音楽の要素を軸としていない。 例) ・情景を絵にする→情景を思い浮かべて歌う→情景を想像しながら合奏する。	題材目標と関連しているが、身に着けさせたい力がわからない。 例) ・情景を想像しながら歌おう。	題材目標との関連はみられるが本時の目標に対応した学習活動の記載が少ない。 例) 曲想を感じながらグループで工夫する。
2	つながりが部分的である。 例) ・歌の感じをからだ表現する→歌にあわせて合奏する→グループで発表する。	題材目標との関連が不明確である。 例) ・オリジナル茶つみをつくって楽しもう。	何のための学習活動かが不明である。 例) ・各グループで練習をする。
1	つながりを意識した記述が見られない。 例) ・歌って表現する→からだで表現する→楽器で表現する。	1時間の目標になっていない。 例) ・いろんな「茶つみ」を感じよう。	目標に関連する学習活動の記載がない。 例) よかったところと悪かったところを伝える。

項との関連や指導者の働きかけとの対応について評価し、考察する。

西岡（2003）によると、ルーブリックとは、パフォーマンスに基づく評価において用いられる採点指針のことであり、学生の記述がどの程度出来ているかを数段階に分けて採点するための基準を典型的かつ具体的に示すものである。ルーブリック評価は個人の多様なパフォーマンスや、捉えにくいとされている思考力や洞察力などを評価したりすることにふさわしい評価方法であり、個人内評価と目標に準拠した評価を統合する方法の1つである。

佐伯（1995）が記しているように、教育の目標はもともと「どこまでわかる（できる）ようになってもらいたいのか」という開かれた行動の兆候であり、特定の行為や行動で定義できるものではない。従って、基準に想定されたパフォーマンス以外の多様な価値ある構想が表出されるのが常である。

特に、芸術科目では拡散的思考を認め、後に変奏や作曲につながる創造性をひきだす表現活動と

表2 学習活動と指導者の働きかけおよび共通事項との関連（ループリック2）

基準	指導者の働きかけとの関連	共通事項との関連
4	各活動に具体的記述がある。 例) どうしてその楽器を選んだのか、情景にかかわらせて理由を言うように働きかける。 ※すべての活動に具体的記述あり	共通事項もしくは音楽的要素から単語を使って記載している。 例) 「茶つき」の合いの手のリズムを聴き取って手拍子をする。
3	目標に関連した主要な活動に具体的な記述がある。 例) 「茶つき」のDVDを視聴し、合いの手や出だしのリズムの面白さに気付かせる。	共通事項を意識しているが、共通事項もしくは音楽的要素と考えられる単語がみられない。 例) 情景にあう身体表現をする。
2	目標に関連した主要な活動に記述があるが具体的な手立てが記述されていない。 例) 「茶つき」にあうようなリズムをグループで考えさせる。	すべての学習活動について、共通事項との関連が不明確である。 例) 曲にあわせて、楽器を使って演奏する。
1	目標に関連した主要な活動への記述がみられない。 例) 1グループから順番に発表する	共通事項との関連がない。 例) 楽器を使ったグループは片付け、各自ワークシートに感想を書く。 ※すべての活動が手続きについて記載されている。

して、目標到達までのプロセスを設定する教育工学的アプローチが適合しない場面もある。しかし、本稿では、初等音楽科教育法の講義で身に付けさせることのできる音楽科学習指導案作成のための要点を見出すことを目的としているため、今日的な評価観をふまえて、国立教育政策研究所の『評価規準の作成のための参考資料』より想定した学年の評価規準をあらかじめ設定して記述させることとした。

4. 音楽科学習指導案の歴史

学習指導案は、明治から今日に至るまで、学力観や教育観に伴う学習指導法の影響を大きく受けている。

先行研究によると、我が国の教師による授業研究は、制度的な学校と教職の成立期である明治初年に外観が整い、学習過程の記述が変更された明治後期に原型が完成したと記されている。

明治前期に作成されていた学習指導案はペスタロッチ主義教育理論による学習指導法を明記するために「目的」「大意」「題目」「方法」の4項目で構成されており、「方法」の記述が、教師の問いと生徒の答えによる問答形式で表わされていることに特徴があった。

明治20年代後半になると、ヘルバルト主義教育理論が主流となり、項目に大きな変化は見られないが「方法」の学習過程が予備・教授・練習などの段階として記されるようになった。そして戦後は、教授行為と学習活動が対応して書かれるようになり、学習過程の記述に矩形が用いられるようになった。

昭和20年代には生活経験的な「単元学習」に基づく学習指導案が多く作成されたが、昭和30年代には複数楽曲によるまとまりをもった題材（テーマ）が設定され、学問的な系統性を意識するとともに基礎的な学力が重視された。この考え方を出発点として昭和52年に「主題による題材構成」という考え方が確立し、現在も音楽科と図画工作科の指導案で用いられている。この改訂に伴う指導要録の見直しでは、集団に準拠して評価する評定を実施しつつ、併せて目標に準拠して観点別学習状況の評価を実施することが明確にされた。

平成元年は音楽に対する感性の育成が強調され、児童中心の創造的な音楽学習の内容が導入されるとともに、各教科の学びの記録においては目標に準拠して実施する観点別学習状況の評価を基本としつつ、集団に準拠する評定という表現に変わり、目標に準拠した観点別評価への強調が見られる。この頃、学習指導案の指導者の働きかけにおける表記においては「支援」という言葉が多用された。しかし、その後、観点別評価の考えが確立し、支援という言葉が誤解し、指導内容が指導されていない状況があるといった指摘に応じて「指導」という記述が多くみられるようになった。

平成14年には国立教育政策研究所教育課程研究センターが発行した「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料」に、評価規準の具体例が示された。しかし当時の学校での活用頻度が低かったこともあり〔注〕、より簡素で効率的な学習評価が実施できるよう検討した結果、平成22年には「評価規準の作成のための参考資料」が示され、平成20年に改訂された学習指導要領の趣旨を反映していることもあり、指導案作成のガイドブックとして使用されるようになった。

これらの経緯から、現在の学習指導案では評価規準だけでなく、到達段階を示す評価基準を記載する指導案もみられるようになっている。さらに、音楽科と図画工作科は、平成20年度以降、音楽の要素などをまとめた〔共通事項〕が記載されている指導案もみられるようになった。

5. 初等音楽科教育法のシラバス（2014年度）

図1はシラバスの概要である。15回の授業において、第1回～第3回までに音楽科教育の公的資料と概観を講義し、第4回～第11回までに表現と鑑賞の2領域と、歌唱・器楽・音楽づくり・鑑賞の4分野について音楽活動の模擬経験から教育方法を解説した。これらをふまえ、第12回～第15回では、新設された共通事項の説明と指導案の作成及び評価に関する講義を行った。

（授業の目的）

小学校音楽科教育の目標および内容を理解し、それに必要となる基礎的な知識、また音楽科の授業を展開する上で必要となる指導力を身につけることを目的とする。

(授業計画)

第1回

小学校音楽科教育の概要を知る。
小学校で取り扱われる楽曲に親しむ。
教科教育としての「音楽科」について理解する。
保育内容で取り扱われる「表現」との違いについて理解する。

第2回

学習指導要領と学習指導要領の解説の概要を知る。
現行の学習指導要領の基本的な考え方について知る。
教育基本法や学校教育法について知る。
音楽科学習指導要領の変遷について知る。

第3回

小学校音楽科の目標
年齢に応じた、音楽的発達について理解する。
各学年の目標について理解する。
低学年・中学年・高学年での音楽活動を体験する。

第4回

指導内容「表現」—歌唱について①歌唱の意義と留意点
歌唱能力を身に付ける音楽活動を体験する。
ペアやグループで表現し、互いに評価しあう。
学校における歌唱活動の意義と留意点について考える。

第5回

指導内容「表現」—歌唱について②歌唱教材
共通教材や部分合唱を用いた授業の進め方を知る。
共通教材設定の意図と合唱指導について経験する。
ペアやグループで表現し、互いに評価する。

第6回

指導内容「表現」—器楽について①器楽の意義と留意点
小学校で取り扱う楽器について知る。
歌とオルガンによるアンサンブルを体験する。
ペアやグループで表現し、互いに評価する。

第7回

指導内容「表現」—器楽について②器楽教材
器楽教材を用いた授業の進め方を知る。
打楽器によるアンサンブルを体験する。
けんぱんハーモニカ及びリコーダーを用いた表現活動について理解する。

第8回

指導内容「表現」—音楽づくりについて①音楽づくりの意義と留意点
音楽づくりの意義について知る。
リコーダーでおはやしを創る授業の進め方について知る。
オルガンによる旋律づくりを体験する。

第9回

指導内容「表現」—音楽づくりについて②音楽づくりのアイデア
音楽づくりの指導案を読み、音楽づくりの手立てを知る。
声のアンサンブルをつくって発表する。

第10回

指導内容「鑑賞」について①鑑賞の意義と留意点
授業における鑑賞活動の意義について知る。
鑑賞の授業の進め方について知る。
鑑賞教材の授業を経験する。

第11回

指導内容「鑑賞」について②鑑賞教材
鑑賞の指導案を読み、鑑賞授業の手立てを知る。
鑑賞の授業のアイデアを考える。
楽曲の特徴となる要素を感じ取る手法について経験する。

第12回

共通事項について
共通事項が設定された意義を知る。
共通事項が各領域でどのように扱われているかを知る。
音楽活動と共通事項との関連について経験する。

第13回

学習指導計画、学習指導案を読む。
学習指導案の立案の意義について知る。
学習指導案の記載内容と記述方法について知る。

第14回

評価について
評価の種類について知る。
指導と評価の一体化について知る。
評価方法について知る。

第15回

音楽科学習指導案を立案する。

図1 2014年度初等音楽科教育法シラバス

6. 音楽科学習指導案の作成

- 1) 実施年月 2015年1月
- 2) 対象 広島女学院大学3年生51名
- 3) 記述時間 45分
- 4) 課題

曲想や音楽を特徴づけている要素を感じ取って、工夫して表現できるようにすることをねらって、第3学年を対象に音楽科授業を行うこととします。教材「茶つみ」を取り扱って、題材計画及び本時の目標と展開を作成しましょう。

学生に提示する課題にあたっては、共通歌唱教材のうち、学生が児童になって手遊び及び歌唱発表経験のある『茶つみ』を教材に用いた。また、あらかじめ題材の評価規準を提示することで、題材計画と本時の目標及び1時間の指導過程の一貫性を見ることができるようにした。

5) 評価規準

提示した規準は、①音楽の曲想を感じ取って、歌やからだを使った表現をしようとしている。(音

楽への関心・意欲・態度) ②音楽を形づくっている要素を感じ取り、そのよさや面白さを感じ取りながら、どのように歌うかについて自分の考えをもっている。(音楽表現の創意工夫)である。題材の展開、本時の目標、本時の展開以外は記入済みである(図2)。

<p>初等音楽科教育法 学習指導案の作成 学籍番号 () 名前 ()</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>曲想や音楽を特徴づけている要素を感じ取って、工夫して表現できるようにすることをねらって、第3学年を対象に音楽科授業を行うこととします。 教材「茶つみ」を取り扱って、題材計画及び本時の目標と展開を作成しましょう。</p> </div> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="padding: 2px;">1 題材名 「リズムにのって情景を思い浮かべながら歌おう」</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px;">2 題材の目標 曲想や音楽を特徴づけている要素を感じ取って、工夫して表現できるようにする。</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px;">3 評価基準 [音楽への関心・意欲・態度] ・音楽の流れをからだ全体でうけとめ、歌唱表現や身体表現をしようとしている。 [音楽表現の創意工夫] ・音楽を形づくっている要素を感じ取り、そのよさや面白さを感じ取りながら、どのように歌うかについて自分の考えをもっている。</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px;">4 題材について 本題材は、茶摘みの様子を歌った歌として昔から歌い継がれ、日本の風景や生活を感じ取ることのできる歌詞をもつ曲である。 児童は、音楽が好きで、からだを使ったり、楽器を使ったり演奏したりすることには意欲的に取り組む。しかし、歌詞をよく理解したり、情景を想像したりして歌うことはまだ不十分である。 指導にあたっては、曲想や音楽を特徴づけている要素を感じ取って工夫しながら、歌詞の内容を理解したり想像した情景を言葉で伝えよう時間を設定したりして、豊かな表現ができるようにしたい。</td> </tr> <tr> <td style="padding: 2px;">5 題材の展開 (全3時間) 第1時 第2時 第3時 (本時)</td> </tr> </table>	1 題材名 「リズムにのって情景を思い浮かべながら歌おう」	2 題材の目標 曲想や音楽を特徴づけている要素を感じ取って、工夫して表現できるようにする。	3 評価基準 [音楽への関心・意欲・態度] ・音楽の流れをからだ全体でうけとめ、歌唱表現や身体表現をしようとしている。 [音楽表現の創意工夫] ・音楽を形づくっている要素を感じ取り、そのよさや面白さを感じ取りながら、どのように歌うかについて自分の考えをもっている。	4 題材について 本題材は、茶摘みの様子を歌った歌として昔から歌い継がれ、日本の風景や生活を感じ取ることのできる歌詞をもつ曲である。 児童は、音楽が好きで、からだを使ったり、楽器を使ったり演奏したりすることには意欲的に取り組む。しかし、歌詞をよく理解したり、情景を想像したりして歌うことはまだ不十分である。 指導にあたっては、曲想や音楽を特徴づけている要素を感じ取って工夫しながら、歌詞の内容を理解したり想像した情景を言葉で伝えよう時間を設定したりして、豊かな表現ができるようにしたい。	5 題材の展開 (全3時間) 第1時 第2時 第3時 (本時)	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td colspan="3" style="padding: 5px;">① 本時の目標</td> </tr> <tr> <td style="width: 60%; padding: 5px;">② 本時の展開</td> <td style="width: 20%; padding: 5px;">指導者の働きかけ・留意点</td> <td style="width: 20%; padding: 5px;">共通事項</td> </tr> <tr> <td style="height: 150px;"></td> <td></td> <td></td> </tr> </table> <p style="margin-top: 10px;">初等音楽科の教育内容は、2領域で構成されている。</p> <p>1つは、表現領域、もう1つは(③) 領域である。</p> <p>表現領域には歌唱・(④) ・(⑤) という3分野の音楽活動がある。</p>	① 本時の目標			② 本時の展開	指導者の働きかけ・留意点	共通事項			
1 題材名 「リズムにのって情景を思い浮かべながら歌おう」															
2 題材の目標 曲想や音楽を特徴づけている要素を感じ取って、工夫して表現できるようにする。															
3 評価基準 [音楽への関心・意欲・態度] ・音楽の流れをからだ全体でうけとめ、歌唱表現や身体表現をしようとしている。 [音楽表現の創意工夫] ・音楽を形づくっている要素を感じ取り、そのよさや面白さを感じ取りながら、どのように歌うかについて自分の考えをもっている。															
4 題材について 本題材は、茶摘みの様子を歌った歌として昔から歌い継がれ、日本の風景や生活を感じ取ることのできる歌詞をもつ曲である。 児童は、音楽が好きで、からだを使ったり、楽器を使ったり演奏したりすることには意欲的に取り組む。しかし、歌詞をよく理解したり、情景を想像したりして歌うことはまだ不十分である。 指導にあたっては、曲想や音楽を特徴づけている要素を感じ取って工夫しながら、歌詞の内容を理解したり想像した情景を言葉で伝えよう時間を設定したりして、豊かな表現ができるようにしたい。															
5 題材の展開 (全3時間) 第1時 第2時 第3時 (本時)															
① 本時の目標															
② 本時の展開	指導者の働きかけ・留意点	共通事項													

図2 学生が使用した指導案シート

7. 結果

題材の目標との関連について、基準ごとの人数の分布結果が表3である。また、基準を1段階ごとに25点として換算した結果が図4である。

題材目標と題材計画、及び本時の目標について基準3が最高値であるが、学習活動との関連については基準2の方が4名多い。そして、題材計画、本時、学習活動と児童に直接関わって具体化されていく構想に従って、評価が下がっている。

題材の目標は、「曲想や音楽を特徴づけている要素を感じ取って、工夫して表現できる」としたため、学習活動のなかに、どんな特徴を感じ取るためにどのような活動を設定しているか他者に理解できることが必要である。

しかし、題材目標と学習活動との関連における、基準2の記述例には「自由に工夫して楽しむ。」「楽しみながら身振りを工夫する。」という記述例が多く見られた。基準3には、「茶つみの合いの手をよく聞いて手合せをする。」というように、題材の目標とは関連しているが、本時の目標「情景を想像して歌おう」との関連がない例が見られた。基準4は、「思い浮かべた情景を一人ずつ小さな紙に描いて説明し合う。」「はずんだリズムに合うからだの表現を考える。」といった記述例があった。

表3 題材目標との関連

基準	題材計画 (人数)	本時の目標 (人数)	学習活動 (人数)
1	0	0	0
2	4	11	24
3	35	33	20
4	12	7	7
合計	51	51	51

表4 題材目標との関連
(換算得点による集計)

点数	題材計画	本時の目標	学習活動
換算合計得点	4025	3725	3400
平均点	78.9	73	66.7
標準偏差	13.4	14.7	17.6

また、本時の目標構想までは題材の目標との関連があったにも関わらず、学習活動の記述において、基準が下がった人数は13名であった。学習活動と題材目標との関連について、基準2の学生が約半数を占めていることやばらつきの大きいことも含めて、学習活動の記述を支援することが要点の1つであることがわかった。

学習活動と指導者の働きかけの対応記述については、表5にみられるように、基準3と基準4をあわせた学生の数が82.3%であり概ね良好な結果となった。しかし、学習活動の構想に共通事項との関連が見られるものは62.7%にとどまっている。

図2は、学生が使用した指導案シートである。右欄の共通事項については、評価の観点（関心・意欲・態度、技能などの4観点）や分野（歌唱・器楽・音楽づくり）と混同して記述しているものが29.4%あった他、空欄となっているものが10.1%みられた。

表5 学習活動との対応

基準	学習活動と指導者 の働きかけ (人数)	学習活動と共通 事項 (人数)
1	0	1
2	9	18
3	28	25
4	14	7
合計	51	51

8. 考察

(1) 傾向

題材の目標との関連について、題材計画を立案し記載する際には目標を意識していることが伺えるが、楽曲のもつ特徴を焦点化して意識することができず、本時の目標についても、活動自体が目的化した表現になっている傾向が見受けられた。特に学習活動については、目標との整合性がなくなる記述が増加しており、書いているうちに活動の順序性にとらわれたり、学生自身が経験した活動にとらわれたりしているのではないかと考察する。この傾向を改善するためには、授業で学生に経験させる音楽活動においても、音楽的要素を意識させて進行することや、学生が指導計画を記述した後に、目標との一貫性を各自で見直すよう示唆することが必要ではないかと考える。

共通事項については、基準2の割合が3割以上であり理解が十分とは言えない。音楽科と図画工作科にしか見られない概念であることを踏まえると、言葉自体も定着しにくく、他教科と識別ができるような働きかけが必要であったと考える。また、記述欄の記載がない学生の理由は不明であるが、共通事項の意味がわからなかったという理由や、重要性を感じていなかった理由等が考えられる。題材の目標と学習活動が関連している学生は、共通事項と学習活動との関連も見られることから、題材の目標で中心となる音楽的要素を意識させるようにすることで、3項目の一貫性が成立する可能性がある。指導者の働きかけと学習活動との対応は、フォーマット上、左右対称に書くような工夫があるため、全体得点が高かったが、指導者が何のためにどのように働きかけを行うかということを、他者にわかるように示していくようにすることが必要である。

(2) 課題

初等音楽科教育法では講義と実技体験を行って双方の意味をつなげるよう進行してきたが、実技で行動したことの記憶が強く残り、日常語以外の教育用語の意味の定着が不十分であることがわかった。また、8～9歳の発達状況と幼児の発達状況を混合して記載し、目標に向かった記述にならない指導案も見られた。保幼小の接続は、今日的な社会課題であるが、学習指導案だけを観察しても、著しい違いがある。その違いを理解しながら、連続した子どもの成長をふまえて学習活動を構成し、働きかけを変化させていく必要があると考える。今後の授業進行に際しては、小学生の発達に応じた働きかけの具体例を示したり、保育所・幼稚園と小学校の環境の変化や学習課程の違いについて、比較したりしながら講義していく必要があることが明らかになった。

9. おわりに

本研究では留意点を焦点化することを目的とし、本稿では学生が設定した目標と教科目標や学習内容の整合性、目標と指導者の働きかけの対応の記述表現ができるようにするための要点について考察した。今後の研究にあたっては、指導案の記述と学生の部分実習の成果を照らし合わせるなどして、実践力と言葉のつながりを深めていく必要がある。

注

文部科学省は平成15年に教師と保護者に対し、意識調査を実施しており、観点別評価の収集・分析に負担を感じる教師が約40%にのぼっていた。

参考文献

- 国立教育政策研究所 (2010) 「教員の質の向上に関する調査研究報告書」。
- 佐藤 学 (2013) 『教育方法学』 岩波書店。
- 新山王政和、滝藤友美 (2010) 「音楽の諸要素と向き合わせることをめざした新しい視点からの学習指導案モデルの開発」—小学校学習指導要領 (音楽) の「共通事項」に対応したモデル案作成の試み、愛知教育大学研究報告, 59 (芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編)。
- 相場孝行, 河野真也, 後藤貴裕, 中村直人, 宮寺庸造, 横山節雄 (1999) 「学習指導案作成支援システムの開発・評価」 社団法人電子情報通信学会, 信学技報。
- 北尾倫彦監修 (2011) [平成23年度版] 『観点別学習状況の評価規準と判定基準』 小学校音楽, 図書文化。

引用文献

- 千々木敏弥（2014）「校内研究としての授業研究の現状と課題」『授業研究と校内研修』日本教育方法学会編 p. 18.
- 西岡加名恵（2003）『教科と総合に活かすポートフォリオ評価法』図書文化．
- 佐伯 胖（1995）『「学び」の構造』 p. 149.
- 小関崇司（2003）「音楽科学習指導案の史的研究—明治期から現代までの変遷」上越教育大学芸術系コース（音楽）修士論文要旨． <http://www.juen.ac.jp/lab/masafumi/pdf/koseki.pdf>（2015年2月採取）.
- 国立教育政策研究所（2010）「児童生徒の学習評価の在り方について」 pp. 3-4.